

# 地域コミュニティ再生を担うのはだれか

～女性・高齢者が主体の地域づくり～

Who are the Main Players in Revitalizing Local Communities in Japan?  
 —— Re-Creation of Local Communities by Women and Senior Citizens ——

鈴木 裕 範  
 Suzuki, Hironori

## ABSTRACT

The Japanese language has a word “結 い” or “Yui”, which conveys the concepts of mutual assistance and cooperative labor. This word is considered to be outdated because what it represents no longer exists in modern society. In the past, “Yui” was at the heart of every community, but in modern times most local communities, whether rural or urban, have lost this ideal.

There have been previous attempts to regenerate local communities, but the many problems sometimes seem insurmountable. Against this background, renewed efforts are being made to revive the original idea of local communities and recreate them as the basis of their life. These efforts are supported mainly by women and senior citizens who cooperate with local government. Since women have been active in local communities throughout their lives, they have the power to change their communities once they start to take the initiative.

Who are the main players for revitalizing local communities in intermediate and mountainous areas that are suffering from depopulation and aging? This paper discusses an alternative way to revitalize local communities by introducing two model communities in the Tohoku and Shikoku Regions.

「結い」という言葉が、あった。「ある」ではなく「あった」、と過去形で述べたのは、それが、私たちが生きる現代という時代状況にほかならないからである。

「結い」とは「共助・互助」、すなわち「協同」の思想であり、実践としての「協働」を言う。それは、「地域力」を意味している。この国の、地域社会における根幹には、かつて「結い」が日常的に存在していた。今日の多くの地域社会が一都市、農村を問わず一失っていったものが、その精神でなかったか。

「地域社会の再生」が言われて、久しい。課題は山積し、困難な問題が目立つ。そのなかで、地域社会を自分たちの手に取り戻し、暮らしの場、生きる拠点として整え直す試みがみられる。行政などと協働で取り組む女性や、高齢者たち。暮らしの深いところで地域と濃密にかかわってきた女性たちが、主体的に行動するとき、地域社会が変わり始める。

過疎・高齢化が進む山村、中山間地域における地域再生の主体は誰か。本論文では、東北と四国地方の2つのモデルをとおして、地域コミュニティ再生へのもうひとつの可能性について論述する。

## 「結い」ということ

「結」または「ユイ」について、『広辞苑』は物を結う、結ぶ、結合するのほかに、「田植えなどのときに互いに雇われて、力を貸すこと。また、その人。てまがえし<sup>(1)</sup>」の意味がある、と説明している。

「手間換え・手間借ともいわれているように、組内各戸間の労力交換」制度で、田植えや刈り入れなど農耕をはじめカヤを刈ったり、屋根の葺き替え、餅つき、道普請や災害復旧など幅広く行われてきた。「多くの場合、出動個人の労力の強弱には拘泥しないが、一日出動の労力に対しては、必ず一日の労力を返して、金銭や物で相殺することを許さぬ<sup>(2)</sup>」のが、結いである。

結いは、「殆ど全国各府県にまたがって」おり、「山間僻地の村に至る程明瞭に

(1) 『広辞苑』第二版第二刷

(2) 柳田国男監修『民俗学辞典』「村制 ゆい」 p647～648

現れている」。鈴木栄太郎氏の調査によれば、呼称は地方によってさまざまだが、「ユイ」と呼ぶ地方が一番多いという。

結いはどうして、列島の各地に生まれ定着してきたのか。「結い」が存在する合理的な理由があったはずである。鈴木は、「個人の労働を社会的に、あるいは経済的に認めてその労働に対して一定の権利が生じたことを認める制度が今日に至るまで歴史的に存続してきた」と指摘する。「家の独立と尊厳を維持するため」に「相互援助に節度を与えるものとして存在」した。しかも、それは労働能率を高めつつ、「娯楽性」をも備えていた。「男同士、女同士で、同年輩でユイを作る場合が多かった<sup>(3)</sup>」。その発生は江戸時代頃とみられる。民俗研究家で宮城教育大学非常勤講師 結城登美雄氏は、それが「昭和 30 年代以降忘れられていった」という。

宮城県綾町は、かつて「夜逃げの町」と噂された貧しい土地であった。この町が、住民に語ったのは「結いの心」であった。照葉樹林の森を守り土を大切に作る地域づくりは、森林環境と文化、農業の先進地として、人間と生命について考え実践する土地として再生される。各地区にある「自治公民館」を拠点に、地域社会をよりよいコミュニティに整え直していくとき、「結いの心」の復権はスローガンとなる。今日この町は、年間約 120 万人もの観光客が訪れる地として知られる。

沖縄県国頭村奥集落の共同店の取り組みとその意味について、結城登美雄氏が紹介している。その店は、明治 39 年村民全員が出資して設立された。「赤ちゃんから高齢者まで村民全員が株主」となり、日用品の共同購入・販売から村船の所有、店の収益で奨学金制度を設け、医療費の支援など、住民みずからが自立し共同で地域の暮らしをつくってきた。その根幹にあった精神が「ゆいまーる」、やんばるの「結い」であると、結城氏は言う。

ところで、「結」と同じ意味を有する言葉に「舩」がある。「もやい」、船と船

---

(3) 鈴木栄太郎著「日本農村における社会関係第 4 項労力交換の慣習」（「日本農村社会学原理『家族・婚姻』研究文献選集」）p379～385

とをつなぎ合わせて碇泊することで、そこから「二人以上のものが一緒に仕事をする。共同」の意味で使われてきた。「結い」が農山村で共同を指す言葉として使われたのにたいし、「もやい」は漁業、海岸部で使用されてきた。

### 「結い」を知っていますか

和歌山県内のある町で開かれた地域づくりの会議に出席したときのことである。その場に居合わせたのは30代から50代までの男女10人であったが、その住民のほとんどが、「結い」という言葉を知らなかった。

「結い」を知っていますか。筆者は、最近会う人ごとに、こういう問いを發してきた。聞き返す人がいる、怪訝そうな表情を浮かべる人がいる。「ええ」という答の数は、そうした人のあいだにあって、頼りなげに見えた。

筆者は、2004年11月「結い」と「舩」の認知度についてアンケート調査をおこなった。そのひとつが、授業で大学生に聞いた結果である。「知っている」「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」そして「知らない」の3つの選択肢から選んでもらい、「知っている」または「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」と答えた人にたいしては、説明を求めた。アンケート調査には、73人が回答してくれた。以下は、その結果である。

結いについて「知っている」11人、「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」36人、「知らない」27人となっている。15%余りが知っていた。

「舩」はどうかといえば、「知らない」が51人、7割を占めた。「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」は19人、「知っている」は3人であった。

もうひとつは、和歌山市和歌浦で「まちづくり」について話す機会におこなったアンケートの結果である。30代から60代、女性2人を含む12人から回答を得た。

結いについて「知っている」は1人、「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」7人、「知らない」が4人であった。「舩」は、「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」と「知らない」が、それぞれ6人ずつで、「知っている」は1人も

いなかった。

回答者は多くはないが、この2つの数字をどのようにみればよいだろうか。「結い」という言葉が、現在の社会においてどのような位置にあるのか、が見えはしないだろうか。少なくとも、想像することは、可能である。

言葉の喪失が意味するのは、何か。そこには、次のような推論が、成立する。すなわち「結い」の、機会と場面の衰退あるいは消滅、である。言葉が暮らしのなかで用いられなくなるということは、実体が稀薄になり、概念は曖昧となって解体され溶けだしていくことを意味する。これにたいしては、次のような反論が予想される。現代は「結い」に代わる共同の、新しい言葉をもち得たためである、と。

では、いま地域社会は、浜田倫紀氏の次のような指摘（『綾』の共育論）に  
応える、どのような答を用意しているのだろうか。若干長いが、引用する。

かつて村落共同体では、貧しいながらも助け合って生きていました。人々はお互いに汗を流して田植えをし、屋根を葺き、道をつくった。こうした相互扶助の労働慣行を「結い」と呼びました。

また人々は寄り合って「邑」の問題を決めました。地縁によるつながりは、地域に住む住民自身による自治の形でもあったのです。

戦後になって、封建色や差別が残る邑社会の集団主義は、民主主義になじまないものとして否定されました。しかし日本の多くの市町村では、かつての結いに代わる新たなコミュニティと自治を持ちえていないのが現状で  
(4)  
す。

揺らぎ続ける地域社会、そのなかでどのようにして地域社会を再構築し、将来を展望していくのか。「結い」と「共同」を手がかりに、現在における「協働」の実相を、女性と高齢者の活動の傍らから捉えてみる。

---

(4) 浜田倫紀著『綾』の共育論 p164

## コミュニティ・ビジネスの担い手は女性たち

### 平均年齢 75 歳。農家レストランの女主人たち

「平均年齢ですか、若い人が加わって少し若くなりました。75 歳です」。奥野幸子さんは、こう言った。宮城県岩出山町にある古民家に、東京から新幹線とレンタカーを利用して来た吟行のグループがいる。大阪からは、有名企業のトップたちが団体で訪れる。目的は、いずれも女性たちがつくる普段着の料理なのである。

仙台市から新幹線と在来線を乗り継いで約 1 時間、東北地方を代表する温泉地・鳴子温泉と古川市の間に、岩出山町はある。人口約 1 万 4 千人、水田の景観が広やかだ。仙台藩藩主伊達政宗が一時期を過ごした城山といくつかの史跡、旧街道に面して建つ「三階旅館」の明治 34 年建築という木造三階建ての建物が、行商人や人力車、馬車などが行き交った、宿場町の往時の残影をとどめる。だが、宿の女将高橋やえよさんが言うように、岩出山町は「観光地ではない」。



凜菜上の家の女性たち

その町に、2002 年 6 月女性たちが運営する、それも高齢女性が中心の“農家レストラン”が店開きした。店の名前は、凜菜上の家。凜は「凜々しい、立派」、「菜」は「旬の野菜、旬の食べ物を提供したい」、そういう願いを静かにこめた。代表の奥野幸子さん（72）には、開店早々の忘れられない思い出がある。来訪した客が、敷居をまたぎながら漏らした一言

である。「凜とした気持ちになるねえ」。

食事を終えた客の多くが、帰りぎわに、見送る女性たちに声をかける。「すてき」「上品」一。

## 古民家を再生，ソフトは女性の知恵と技術

「凧菜上の家」は、町の中心部から車で15分ほど走った山際集落にある。今日風に言えば、古民家を再生し活用した農家レストランということになる。

町が6千万円の事業費をかけて、2002年6月に整備した。建物は地元の富農で肝煎りをつとめた千葉家の住宅であった。1888

年（明治21年）に建てられた茅葺きの母屋はゆったりとした間取りで、囲炉裏部屋やみそべや、馬屋を備え、この地方の農家の建築様式をよくとどめる。

この旧家の家屋は、築100年以上を経過して、住んでいた関係者が亡くなり、傷みも目立っていた。町は、民家を使用しながら保全していくことを決め所有者から借り受けて修復することにし、山際をふくむ地元河北地区住民に地域づくりの核としての活用を提案した。それが、「農家レストラン」だったのである。

誰が管理をするのか、料理は誰がつくるのか。白羽の矢が立ったのは、地元に住む高齢者女性たちであった。町長は、こういって彼女たちを口説いた。「煮物、漬物にお茶。テーブル方式で訪れた人をもてなしてくれればいい。おばあさんたちが作ったものを出してほしい」。

調理は、千葉家ゆかりの奥野さんらが引き受けることになる。この土地で、「母から娘に、姑から嫁に、女性たちによって引き継ぎ、受け継がれてきた家庭の味、伝承料理を提供しよう」、高齢女性たちの挑戦が始まった。古民家の内側になつかしい時間が流れる住空間と、そこで味わう料理。それは、地元よりも、県内外の人たちの間でやがて評判になっていった。



茅葺き屋根の線の美しさが印象的

## 「山料理」が伝承する岩出山の暮らしと文化

凧菜上の家の営業時間は、木曜日から月曜日までの午前10時から午後4時まで。定食は、「お膳料理」である。作ったばかりの料理を漆塗りの器に盛りつけ、



調理場の女性たち



地元の食材でもてなすお膳料理

それを漆器のお膳に乗せて、客人の前に出すので、そう呼ぶ。千葉家が「ハレ」の日などの宴席に使用していたもので、明治という時代が伝わってくる食器である。

料理は、「むかしの素朴な山料理」である。「二の膳」で料金は1500円（2005年2月現在1575円）。2004年3月のある日、筆者がご馳走になった献立を紹介する。

アユの塩振り 炊き合わせ（コンニャク、カボチャ、ニンジン、エンドウ）、干し柿のてんぷら、山芋の包み揚げ、葉ワサビ、ふろふき大根、おひたし（もやし）、きんぴら、トマト、凍り（凍み）豆腐、シイタケ、ヒジキ、ホウレンソウのごま和え、焼きネギの酢みそ和え、長芋とパセリ（柚子、酢、砂糖で味付け）、ばっけみそ（ふきのとう入りのみそ）、漬物（大根、菜の花の酢漬け）、梅干し、ラッキョウ、ご飯、みそ汁

料理は、季節の変化に委ねられる。食を通して、季節の訪れを知り、ひとつの季節が終わり、また次の季節が始まることを知る。「手っ取り早い料理」は出さない。スローフード、である。だが、彼女たちは、そうは言わない。「煮たり、焼いたり、焙ったりしたいなか料理」、と。肉は使わず、生野菜のサラダも膳に乗らない。また、ドレッシングやマヨネーズは使わない。

「凍り豆腐」は、この地方の伝統食のひとつだが、ここで出されるそれは評判がいい。ふわふわしていて美味しいというのが理由である。「コツですか、作り方と炊き方でしょうか」、と奥野さんは答えた。女性たちの食材を生かす知恵や



技術が、随所に隠されている。「たたずまいにあった料理、それを固く守り、こだわって出したいのです」。

食材の野菜や山菜は、規格外のものも使う。地元の生産者などから直接仕入れたり、地元の直売所で販売しているものだ。ささやかではあるが、地産地消という循環の仕組みの具体化である。「支え合い」の仕組みが、小さな「共同」が再生した旧家を中心に広がりつつある。

凜菜上の家の利用者は、年々増え続けており、2004年6月から11月までの8ヵ月間に食事をした人は3109人と、前年度一年間の利用者とはほぼ同数になっている。町外が圧倒的である。県外からの来訪者も目立つ。「5回来た」という人もいる。リピーターが多いのも、特色である。40代から50代の女性層の支持が高い。最近では、若い世代や学生もみられ、インターネットで知って来たという人もいる。その土地の気候風土から生まれる、その土地ならではの味が容易に味わいにくいことと、凜菜上の家の「人気」は、無関係ではない。雰囲気だけの場所も、いまや来訪者を満足させない。

こんな話がある。温泉旅館の女将が「ご飯の炊き方を教えてほしい」と相談してきた。小料理屋の女将は、「茶碗洗いでも何でも手伝うので、料理を教えてくださいませんか」と真顔で言った。プロの料理人が、「研修よりもここに来ておぼえた方がいい」と言ったという。いずれも、食について考えさせる、食と地域づくりのこれからの可能性を示唆するエピソードではないだろうか。そのとき、地域づくりの主体を女性と、高齢者が担うのである。

### すべてが普段着の座敷で

「一服しなすって」という女性たちの言葉が、訪れる人を癒させる。凜菜上の家は、行政が整備した古民家を、地元の河北地区住民が運営する「公設民営」の施設である。

河北地区は約50戸、地区の運営委員会のもとに4つの部会がある。管理、イベント、語り部、そしてもてなしの各部会である。管理部は、上の家がある裏山

の竹林の伐採など環境を整え、イベント部はもちつき等の行事を企画する。語り部部会は、語り部が囲炉裏端で昔話を語る。そして、地元の食で来訪者を迎えるのが、奥野さんらのもてなし部会である。凜菜上の家をひとつの拠点にした河北地区の地域づくりが、回りだした。女性、高齢者女性が参画し、その知恵や知識を提供したとき、従来見られなかった地域での新しい動きが生まれたとすることができる。



いろいろの間は若い人たちにも人気

当初、凜菜上の家をめぐっては、“陰口”も聞かれたらしい。奥野さんは、多くを語ろうとしないが、「つらいこともいっぱいあった」という言葉に、その辺の事情がかいま見える。いまは、頑張ろうという気持ち強い。

収益の中から人件費として支払われる報酬は、時給 500 円から 600 円。「ボランティアに毛がはえた程度」である。だが、金に換えられない「楽しみ」がある。地域のいまに関わっている、という喜びである。「家にいても昼は一人。ここに来るとボケ防止になっていい。若い人も近くで働け、孫の送り迎えもできるし」。

「日常の食事と生活をそのままおすそ分けするだけ」。従業員は 5 人、2004 年 3 月現在平均年齢は 75 歳である。高齢者女性たちによる共同の活動が、地域に新しい可能性の風を吹き込む。

## 女性たちの自立と共同の拠点・道の駅

岩出山町にある道の駅「あ・ら・伊達な道の駅」は、東北地方にある道の駅でトップクラスの売り上げを誇る。2004 年の売り上げは約 9 億 6500 万円、そのうち 3 分の 1 近くが 1 階フロアーで販売される農産物などの食に関連する売り上げが占める。

この道の駅は、地元を中心とした周辺町村の産品が多いのが、特色である。地



地元の産品があふれる売り場には活気



小さなそばの店は客が絶えない

元の農家などから、季節の野菜や漬物などがつぎつぎに持ち込まれる。凍み豆腐、納豆、煎餅、それにシソ巻きなども並ぶ。女性たちによって伝えられてきた、ふるさとの味である。

シソ巻きは、みそに胡桃とゴマ、それに小麦粉を加えたものを青ジソや赤ジソの葉で包み油で揚げたもので、この地方の家庭の味だ。小さなパックひとつが500円、シソの香が匂う甘辛いみその独特の味が、食事の副食などとして歓迎されている。女性たちのアイディアが、家庭の味を地元の特産品の地位に引き上げた。

面白い現象がみられる。それまで「見向きもされなかった」胡桃の収穫が、競って行われるようになった。理由は、シソ巻きの味に胡桃の実が欠かせなくなったためである。家庭の味は、思わぬ地域資源の需要を掘り起こすことになった。いま、このシソ巻きを中心に年間800万円を売る女性グループも、地元にいる。参入も増えている、パックに貼られた名前が競う。そのほとんどは、女性である。来訪者の多くは、年間の通行量300万台と推定される、マイカーやバスなどの利用者である。2004年の来場者は前年より18.4%多い約273万人を記録した。道の駅は、女性たちの自立と共同の拠点になっている。

### 農家女性たちは地域づくりへの参画を願っていた

農産物などが溢れる売り場の一角に、手打ちそばの店がある。木のテーブルが3つ、隣の人と肩がふれ合うように座っても一度に座れる客はせいぜい20人、

営業時間は午前 11 時から午後 2 時までの 3 時間。この条件で、一年間に 1800 万円を超える売り上げがある。「鵜目そば」、地元の池月地区の農家の“お嫁さん”ら女性グループ「ねっこの会」が運営する。

女性たちによるそばの店は、2001 年 4 月の道の駅の開設とともに始まった。きっかけは地区館で開かれた女性教室で手打ちそばの作り方を習ったことだった。そば打ちにはまった人たちがいた。作ることの魅力を知った女性たちの心を、さらにそばにと向かわせる出来事があった。農地の整理である。「耕地の一部をそば畑に転換し、作ったものを商品化し、さらにそばに打って食べてもらう」、女性たちの夢が膨らんだ。

鵜目地区は農村地帯である。現在、54 戸の住民が暮らす。「人と人のつながりが強く、コミュニティづくりが進んでいる地区である」という。しかし、若い母親たちのあいだには、ある種の苛立ちに似た感情がある。こどもが小学校に入学すると、PTA 活動で母親たちは「世間」に出ることができるようになる。ところが、こどもが卒業すると、今度は一人では行動しにくくなり、結局何らかの活動ができるのはこどもが成長してからということになる。そのとき、彼女たちは年輩になっている、というのである。「コミュニティづくりが進んでいる」

が、若い世代の母親たちにとってみると、地域への参画の機会や場は、決して十分とは言えないのが現状だ。

「このままおばあさんになるのはイヤ」。そば打ちの練習は、家事を終えたあとと自宅や集会所でおこなった。3 年半、勉強をした。そして、代表をつとめる山口敦子さん(50)ら 5 人の女性たちで、手打ちそばの



女性ならではの心配りも評判

店を立ち上げたのである。5 人全員の夫が、賛成しなかったという。資金は、それぞれが貯めた金を出し合った。足りない分は、竹を切って売った収入などをあてた。「本格的な味だ」「こんなおいしいそばをここで食べられるとは思わな

かった」。たちまち、客の間で評判になった。最初の年、山口さんたちは一人前700円のざるそばだけで1500万円近い売り上げを記録する。

女性たちは、手作りの基本にこだわる。そばの材料は、花山村のそば粉だ。タレは、かつお節と昆布、化学調味料は使わない。野菜や山菜は、地元のおじいさんおばあさんにとってもらったものを仕入れる。「張り合いができた」という言葉を聞くのがうれしい。自分の家で採れるタケノコやコメも、食材になる。「5人いればアイデアが沸々と湧いてくる。まねからはじめて、自分たちのものを作れるようになった」と、山口さんは話す。家庭でやっていることの延長線、醤油のまろみをつけて焼いたおにぎりが予想外のヒット商品になった。

「地場産品を使った製品をお客に出していく。できれば、高齢者の生きがいにつながるような仕組みを作ることができればいい」。高齢者の居場所がある地域づくりへ、高齢者の社会福祉施設建設は、山口さんたちの“目標”になり始めている。

## 700万円を借金し起業したのはパン屋だった

焼き上がったばかりのパンが、店頭に並ぶ。屋前には売り切れになる、人気商品がある。行列ができるパン屋として、テレビで紹介された。仙台市からわざわざ、買いに来る客がいる。定休日をなくし、週末は高校生や20代の若い女性たちにアルバイトで協力をしてもらう。「アンマローネ」、創業4年、道の駅にある小さなパン工房である。



店頭に並んだ焼きたてのパン

高橋妙子さんは現在46歳、3人のこどもの母親である。嫁いだ家は兼業農家で、舅姑がおり、夫は料理長をしていた。20歳の時である。高橋さんは24歳のとき、最初の起業をする。鮮魚店を始めたのである、「店を持ちたかったのと魚

屋が地元になかった」のがきっかけだった。

2度目の転機は、40代になってすぐにやってくる。中学校が統廃合でなくなり、そこに道の駅を建設することになったのである。地区館長からの協力要請で、当初は男性たちが出店について検討していたが、話がまとまらない。高橋さんと友人の女性が、パ



起業家の高橋さん(左)と山口さん(右)

ン屋を立ち上げることを決断する。パンづくりは、仙台市や茨城県まで出かけて学んだ。そして、高橋さんは鮮魚店を閉め、友人の小野松不二子さん（55）はつとめていた電子部品工場を退職した。資金は「10年返済の約束で銀行から700万円を借金して」のスタートであった。2001年のことである。

道の駅内にある店のスペースは、決して広くない。「常に勉強して、できるだけいいもの、きれいなものを出したい。遠来からの常連客、「パン屋に入ったことがないという地元のおじいさん、おばあさんが手づかみで買って帰る」。開発が新商品を生む。国道にちなんで47種類の商品を作るという目標は、すでに超えて、60余りになった。売り上げは5千万円にのぼる、「一日平均5万円」が、いま目標である。

2人の主婦が借金をして立ち上げたパン工房は、20代から50代までの社員4人、パートタイマー1人の5人が働く合名会社池月バイトウ商会になった。どうして、パンだったのですか、高橋さんに聞いてみた。「長持ちするのは、食べ物。人間、食べるものでないといけない」。開業から4年、平均年齢がほんの少しか高くなった。「若い人を育てていきたい。ここが、そうしたひとつの場になればいい」。パン工房の先に続く道筋に、地域の将来がある。

### なぜ、この町の女性たちは元気なのだ

地域の女性や高齢者が、生活に根ざしたモノやサービスを提供するコミュニティビジネスが、岩出山町で広がっている。

岩出山町は、もともと保守的な風土の町である。たとえば、こんな話がある。女性が無人販売所を設け、自分たちがつくった農作物を売ようになった。すると、一部から「男が働きに行けば一日1万円、女が働いても千円。金にならない」という批判の言葉が浴びせられた。ところが、一日70台ほどの車が通る程度の地区に、客が大勢訪れるようになった。売り上げが何万円にもなった、ある高齢女性はモロヘイヤを並べて年間30万円になったという。別の女性たちは、農協の跡地に建てた納屋で「ばあんつあん市」を始めた。5月から11月までの間の週2日、それも営業時間は5時間だけ。店は客でいつも賑わっている。「お茶っこ、飲んでって」、新鮮で安い野菜に加えて茶と漬物で、あたかも親戚を迎えるようなサービスが口コミで広がり、購買客を広げている。「金ではない、買ってもらえることが楽しい」。素朴であたたかくて、女性ならではの心配りがのぞく。地域に根ざし、身の丈にあった取り組みなのだ。「女性が田舎の豊かさに気づけば、地域が変わる」具体例がここにある。

岩出山町のまとめでは、町内での起業は1996年からみられるようになり、2000年3件、2001年には5件もあり、この9年間の起業件数は16件を数える。そのうち14件は女性によるもので、内容は農産物加工が6件と一番多く、次いで惣菜製造3件、飲食業2件などとなっている。「道の駅が、女性たちに生産したものを販売する場を提供したことが大きい」と町の担当者は説明する。裏返せば女性の潜在的な意欲が、埋もれていたという証しである。

ところで農林水産省の調査では、農村女性による起業は年々確実に増えている。2002年度は7,735件で、1993年からの10年間で約5.5倍増えた。内容は地域農産物を利用した農産物加工活動が7割近くを占め、次いで朝市、日曜市などの販売・流通が多い。また、グループによる経営が7割を超す。経営規模は小さく、6割以上のグループは年間の売り上げが300万円未満だが、1000万円以上の大規模経営も増えている。そして、こうした数字はすべてではないことに留意する必要がある。

起業後の経営安定化は、確かに課題である。経営体としての規模においても、



収益においてもである。しかしながら、筆者は、女性起業がもつもうひとつの意義と価値について注意を喚起しておきたいと思う。前述した取り組みが示すように、起業した女性たちは、必ずしも販売額の多寡にだけ固執していないという事実である。そこでは、将来にわたって地域に関わっていききたいという思いが、起業のインセンティブになっていることを、見落としてはならない。「生活者」や「地域」の視点が、女性の起業には強く現れている。「共同」による「協働」は、それぞれを自己実現するうえで、必要なのだ。地域の人をつなぎ資源を発掘する、みずからの生と暮らしを豊かにしつつ、地域を耕す。そうした可能性を、増え続ける起業のうちに確認しておきたい。地域と積極的に関わる道が開かれるとき、女性は地域づくりの主体へと成り上がる。桎梏は、取り除かなくてはならない。

### 男女平等推進条例の町 男女共同参画がせまる意識改革

岩出山町に、地区ごとのまちづくりセンターがある。従来の公民館を地域づくりの拠点として位置づけ直し、地域づくりに関わろうとする住民の意欲と行動に応える受け皿の機能をもつ。女性の起業をも、支援する。ここで開かれる事業が、きっかけになった例もある。

岩出山町は、2000年12月、男女平等推進プラン「いわでやま男女平等推進条例」を制定した。前年に制定された国の男女共同参画基本法を、地域に則したものにし、地域社会の再構築に生かそうと考えたのである。全国で最初となった。「いわでやま男女平等推進条例」の前文はつぎのように始まる。長いが、下記に紹介する。

すべての人は、その性別にかかわらず、個性ある一人の個人として尊重されなければならない、一人ひとりの尊厳を確保する地域社会でなければならない。

日本国憲法は、すべての人に等しく人権を保障している。しかし、この憲法が制定されてから半世紀が経過した現在でも、現実社会の幾つかの場面



においては、今なお、性別による固定的分業、それに基づくさまざまな因習や慣行が根強く残存している。人をその個性や能力で評価するのではなく、性の違いだけによって評価し、その生き方をも拘束するというあり方は、人を個人として、ひいては、人間として認めないということに通じる。そして、「前文」は、こう続ける。

私たちが目指す「男女が対等な立場で、基本的な構成員として、共に責任を担い、共に協力する男女共同参画社会」とは、とりも直さず、人権が保障された男女平等社会に他ならない。

新しい世紀において、この町に住むすべての人が、その性別にかかわらず一人の個人として大切にされ、一人ひとりが個性豊かに生きることのできる、そのような岩出山町を築くために、私たちは、伝統ある学問のまちの住民として、その誇りと名誉にかけて、ここにこの条例を制定する<sup>(5)</sup>。

「条例」が掲げる精神は、対等なパートナーである女性の参画による、男女共同による地域社会の実現である。自律する個人と相互扶助、そうした主張を読みとることも可能である。

筆者は、町内の10人近い女性たちから、彼女たちがいまいる位置について聞いた。それらの大要は、次のようにまとめることができる。

岩出山町は、保守的で3世代同居の家が多く、女性たちはともすると自分の考えを余り外に出さず、「息を潜めて生きてきた」傾向がある。そして、「出る女性がいると、足を引っ張る」。家の仕事をしていると、「おとなしくてよい妻、よい嫁」と見なす風潮が、存在するというのである。何が、女性たちの行動の前に障壁となって立ちふさがってきたのか、みずからへの自省もふくめた吐露がある。

条例制定を説明する地区懇談会。「女性が生き生きとしている社会」の必要性を説く町幹部の女性職員に、「男の人権もあるぞ」という声が浴びせられたこと

(5) 岩出山町資料

もあった。「肩身が狭くなった」という男性の声も聞かれる。それでも、教育・福祉施設「感覚ミュージアム」館長千葉啓子さん（49）は、次のように話す。

「妻が病気になる、夫が炊事を始めた。その家ではそれまで見られなかった光景だった」。別の家庭の話である、「親の面倒をみるのは女性のつとめ、といっていた夫が介護を分担するようになった」。千葉さんは、住民が条例を意識し、良い方向に向かいだしたと感じている。「女性の参画の場がもっと多くなり、女性の力が引き出されれば」と考えている。

岩出山町役場では、職員の約半数は女性である。係長以上の管理職は4割を超す。各種審議会における女性の割合は31%で、全国の町村の平均の2倍近い。政策決定に女性の意見を反映させていこうという姿勢がうかがえる。女性がもっと前に出る地域づくりへの、試みである。

### ふたたび女性たちは

岩出山町が、地区ごとに設置した地域づくりセンターは「地区館方式」と呼ばれる。地域振興を目的にしている。地域の振興は、まちづくりの拠点や起業・産業の創出だけにとどまらない。教育、福祉、そしてコミュニケーションの場など、幅広い。地区館の館長に、女性の起用もみられる。男女平等推進条例の制定が、女性たちの背中を後押しし、地域社会の持続的な発展のために、協働のあらたな仕組みを整え直す必要性を迫っている。求めている。

岩出山町は、将来的には古川市など隣接市町村と合併する予定である。そのとき、地域づくりは。また、地域の拠点である地区館はどうなるのか。見えない合併後の町の姿にたいする不安の声もある。

高橋さんと山口さんに、合併問題への見方を聞いた。「わたしたち的には」、2人から返ってきたのは、「（新市に組み込まれても）お客さんには影響はない」という答であった。事業にたいする自信。そして、「ここは、人のつながりが強く、コミュニティづくりが進んでいる」。この地域では、「結い」もまた健在である。

## 山村で高齢者の生活とコミュニティを守る

愛媛県から消えた村がある。柳谷村である。2004年8月、市町村合併で、久万高原町となり、柳谷の名はなくなった。

2004年12月20日、マイクロバスが、広い村内に点在する集落をめぐっていた。社会福祉協議会が行うデイサービスを利用する高齢者のための、送迎バスである。住民が主体で運行する高齢者のための、ボランティアバスだ。

午後3時30分過ぎ、かつての役場（現在支所）に戻ってきた運転手は、鶴井国夫氏（1942年生まれ）であった。「柳谷方式」と呼ばれ、住民が地域の高齢者福祉を担うバス、その生みの親である。平成の合併により消滅した柳谷村の最後の村長が、鶴井氏であった。

### 旧柳谷村

旧柳谷村は、V字谷が続く山のなかである。人の暮らしは峻険な山の中腹と、麓の谷に刻まれている。旧村役場や郵便局などの公共機関の施設が集まる、国道33号沿いの地区をのぞけば、31ある地区のほとんどは、標高250から800メートルの山の急斜面にへばりつくように点在する。家々が国道の頭上に浮かぶ、「天空の村」である。

旧柳谷村は、高知県との県境に位置する。標高千メートル以上の高原に展開する石灰岩台地「四国カルスト」への入り口にあたる。面積の90%以上は、山林が占める。主な産業は林業と畜産、高原野菜などの農業、観光である。合併前の2004年8月の人口は約1300人、高齢化率は50%を超えた。年金生活者が多く、「年金が村の産業」の声も聞く。



「柳谷」の名が消えた村

過疎と高齢化に激しく揺れるその村が築き上げたのが、柳谷スタンダードのコミュニティ

形成である。小さな村が地域の総合力で取り組んだ、「支え合い」の仕組みがそこにある。

### 「い」のころを高齢者福祉に生かす

高齢者の命を守り暮らしを支える地域づくりが、柳谷村で始まったのは1998年のことである。村長に当選した鶴井氏は、高齢化率が上昇しつづける村に危機感を募らせていた。「安心して生活できないところに、人は住めない。どうすれば、住民に安心感を与えるか」。高齢者福祉は、村の最優先政策になった。

とはいえ、財政規模が小さな村にできることは限界がある。鶴井氏が注目したのは、自分たちの村で、住民が日常生活で自然におこなってきた慣習を見直し、復活させることであった。2004年3月、当時の村長室で鶴井氏は語った。

「道普請、草刈り、むかしは相互扶助が全国どこでもありましたよね。元気なものが弱いものの面倒をみる、『老老介護』だってあった。地域型の介護です。このむかし型介護が、介護の原点だと思うのです。別の言い方をすると、介護保険は、地域や家族、いろいろな面で絆を弱めている、と考えています」。

住民が交わす会話に、「いをする」という言葉がある。「い」とは、助け合い、手伝いの意味で、結いの方言とみていい。人と人、人と地域をつなぐ絆のような役割をあわせもつのが「い」である。柳谷村が住民の協働による高齢者福祉モデルを築き上げてきた背景として、地域共同体のなかにある「い」のころを揺さぶり、呼び覚ましたことが見のがせない。地域力の再構築が、住民のなかにある介護力を引き出す。勿論、首長の強力な指導力と決断もあった。

### 高齢化率50%、旧村民の1割以上はホームヘルパーの有資格者

村は、「住民の1割以上がホームヘルパーの資格をもち、全地区にヘルパーがいる村づくり」を掲げ、1998年から村単独事業として訪問介護員、ヘルパーの養成講座を開催した。村民の負担はテキスト代の5千円、通常のこの種の講座の10分の1以下で、2級または3級の資格が取得可能になる。講座修了者は、

初年度の 1998 年度は 28 人、翌年度は 35 人、3 年目には 44 人を数えた。最終的な資格取得者は 2 級 35 人、3 級 126 人ののべ 161 人、村の全人口の 1 割を超えた。大変な数である。事業は 1 割に達したとして 2001 年度で終了するが、その間 4 ヶ年に、村が支出した費用は総額約 1 千万円にのぼった。

ヘルパー資格取得者のほとんどは、女性であった。「じいちゃん、ばあちゃんをみるのは嫁の仕事」、「夫のため」、動機の多くは、身内のためであった。それが、やがて、「せっかく取得した資格を、有効に生かそう」へと発展していく。「施設は 1 年でできる、しかし人材の育成は 10 年が必要だ」、村長時代の鶴井氏の口癖であった。

### 介護の主役は女性が支える

住民の 2 人に 1 人が 65 歳以上、柳谷村に住む要介護認定者（要支援を含む）は、2004 年 12 月時点で 90 人を数える。

デイサービスの施設は中心部の落出地区にある福祉センターで、ここで月平均 22 日、月曜から金曜日までの午前 9 時 30 分から午後 3 時までおこなわれている。給食から入浴、健康チェック、生活指導それにレクリエーションで、毎月のべ 150 人前後が利用している。担当するのは、社会福祉協議会支所のケアマネージャー、保健婦、そしてボランティアの女性たちである。

この村では、村民の 1 割以上がホームヘルパーの資格を持つ。「訪問介護員養成講座修了者記録」をみると、ホームヘルパーは 2 級 35 人、3 級 126 人ののべ 161 人を数える。そして、有資格者の 99%、ほとんどは女性である。そうした女性たちが、ボランティアで高齢者のデイサービス事業を担う。ローテーションを組み、現在は 1 週間に 2 日、介護のほか手芸の指導や会話、ゲームなどで一緒に時を過ごす。行政から支給されるのは交通費だけである。

ヘルパーが、高齢者の拒絶にあうケースがある。とくに、在宅高齢者のなかには、「見ず知らずのひとに家の中に入って来てほしくない」という抵抗感がある。人間としての自負、誇りも当然ある。人間関係の難しさである。しかし、「とな

りのお姉さんならば」というわけだ（知らない人の方が気が楽、という声もあるが）。

高齢者が、「となりのお姉さん」に気軽に声をかけることができるボランティア・ヘルパーを、この村で可能にした背景には、「地組（じぐみ）」の存在がある。それは、隣近所の結びつきを大切にする地域の伝統的な慣習であった。

「みんなでつくろう安心の村」。旧柳谷村に立つ大きな看板に記された、コピーである。地域住民の2人に1人が高齢者という、愛媛県の深い山間にある小さな村が発信し続けたメッセージだ。

### ともに生きるしあわせを

三好安子さん（56）は、久万高原町永野地区に住む。旧柳谷村である。

2004年12月18日土曜日昼、永野地区にある集会所のテーブルには、旬の野菜を使ったおでんや酢豚、巻きずしなど12、3種類の料理が並び、高齢者のにぎやかな会話が絶えなかった。忘年会を兼ねた、一年の締めくくりのミニデイサービスであった。

安子さんは、林業をする夫と2人暮らし、2人の息子は独立し村外で生活している。安子さんは、ヘルパー2級の資格をもつ。「福祉の勉強をしたかったことと、村内に一人暮らしの母親の将来も心配」で、資格を取った。週に2日、午前9時から午後4時まで福祉センターに出かける。ほかのヘルパー有資格者たちとローテーションを組み、高齢者と手芸をしたり会話を楽しみ、入浴の手助けなどをおこなう。「料理のこと、暮らしの知恵、教えてもらうことは多い」。

ミニデイサービスは、谷森松美さんらヘルパー資格をもつ人たちとともに、



永野地区ミニデイサービスの食事風景（三好安子さん提供）

2002 年 7 月から自主的に始めた。50 戸近くが暮らす永野地区も、高齢化が進む。人の結びつきが強く、「い」が残る地区だ。

毎月 2 回第 1, 第 3 土曜日に開く。集いの名は「あじさいお楽しみ会」、会には、毎回地区内に住む高齢者のうち、20 人前後が参加する。

その日は、食事をしたりゲームをして過ごす。「食事の費用は割り勘で、一人 100 円から 200 円。コメ 1 合ずつを集め、季節の野菜などを持ち寄る」。いまでは、地区の行事になっている。高齢者宅への声かけも、欠かさない。頼むよ、といわれたときは、信頼感でつながった気がしてうれしい。「お互いが気持ちを理解し合い、気持ちよく、ともに生きたいのです」、と安子さんは言う。

急激に進む高齢化のもとで、住民の目が徐々に高齢者問題、介護に向かいだし、地域内で安心ネットをつくりあげる機運が生まれてきたなかで、村は合併を選

択したのである。合併の影響はどうか、「全然変わりません。ボランティアを始めたときから行政に頼らないと決めましたから。地区のことは、自分らでやります。私たちのデイサービスは、これからも続けます。私たちよりも若い世代に、引き継げたら」。住民自治のサービスが、地区を支える。2005 年、安子さんたちの取り組みは、4 年目に入る。



ミニデイサービスで時を過ごす  
(三好さん提供)

### ボランティア住民が高齢者の足に

柳谷村の 31 地区のほとんどは、隣接していない。集落は異なる山に点在する。ある地区から別の地区に行くには、必然一旦山を降りて登り、降ってはまた登ることになる。10 世帯 19 人の住民がいる中久保地区。そのうち 17 人は 65 歳以上、残る 2 人



高齢者の“足”は住民が支える



も64歳である。

この地区から福祉センターがある中心部の落出地区までは、27キロの道のりである。村営バスで片道4,50分、タクシーを利用すれば、一回で3千円から4千円が吹き飛ぶ計算だ。そのうえ、地区によっては、村営バスに乗るために30分から40分かけて最寄りの「駅」まで歩くことになる。

高齢化社会にあっては、安心して利用できる交通機関があるか否かは、切実な問題である。移動手段は身近かで日常的であるだけに、直ちにひとびとの生活を制約することになる。柳谷村が行ったのは、送迎バスが「家の角まで迎えに来てくれる」デイサービスであった。

送迎バスの運行はデイサービスがある日の朝夕で、運転手は専属の職員ではなく、ボランティア休暇を基本に公募した住民である。役場の職員や議員、郵便局長や転勤族の会社員、それに定年を迎えたひとなどもいる。平均年齢は40歳代、ほとんどが男性である。柳谷村では、村民ならば健康診断の受診など一定の要件を満たし誓約書を提出すれば、だれでも高齢者支援ボランティアになれる。村が負担するのは、登録の際に加入するボランティア保険料と年間7万円程度のガソリン代、不測の事故などは自己責任が原則だ。2004年3月時点の登録者は97人、男女ほぼ同数であった。ボランティアの仕事は、送迎バスの運転手とデイサービスの調理担当で、調理は子育てが一段落した世代の女性を中心である。ここに、高齢者の生活を支える、もうひとつの「柳谷方式」があった。

中津地区の西森キヌエさん（1922年生）は、「おかげで、病院での診察から役場や郵便局の用事、買い物などもできる」と感謝する。デイサービスの日は、高齢者にとって日々の生活に必要なことをすませる日になる。

松岡ヨシコさんは夫と2人、ふるさとに暮らす。1933年生まれ、ヨシコさんの若々しい表情からは、70歳を越えたようには見えない。日課は自宅近くの畑での野菜作りである。山峡の澄んだ空気とめぐる季節のなかで種を蒔き、育てた野菜を収穫する。旬の野菜は、食卓に上る。「大根、ホウレンソウ、高菜、ブロッコリー、からだにいいものは何でも作っています。自分で作ったものは安全で、



新鮮です」と言う。

2人が住む立野地区の住民は、現在10人。「近所隣り、仲良くありたい」、ヨシコさんの願いだ。あたたかい人間関係の上に成立する、やさしい日常と人間らしい暮らし。静かで穏やかな時間を生きる夫婦の姿がある。

### 柳谷村モデルは生かせるか

2004年8月1日誕生した「久万高原町」。合併した上浮穴郡4町村、久万町、面河村、美川村、柳谷村の第2期（平成15年度～17年度）『介護保険料等一覧表』がある。

介護保険料を『一覧表』で比較すると、旧町村のうちで一番高いのが面河村で月額3831円、逆に一番低いのは柳谷村の2363円で、2つの村の間にはじつに1500円近い開きがあった。柳谷村のそれは、4町村の平均3272円に比べても約千円も安く設定されている。1期から2期の引き上げ額が一番少なかったのも、柳谷村である。また、デイサービスに関する柳谷村の2003年の支出は約310万円にとどまっている。住民ボランティアによる福祉の村づくりが、支出を抑制していたのである。

2004年春、3選を果たした鶴井氏は、新町スタートともに公職から身をひいた。無職になり、9月から周囲が驚く中ボランティアでマイクロバスの運転を始めた。12月からは、週に2日ハンドルを握っている。「経済的価値では計れない、気持ちの対価を感じる」という。

「下駄ばきヘルパー」の名で知られる長野県・栄村をはじめ、小さな村にキラリと輝くコミュニティづくりがある。旧柳谷村の住民の協働による高齢者福祉の取り組みは、山峡の村がおかれたきびしい現実と向かい合うところから出発した。行政の小さな単位であり、生活、暮らしの現場から生まれたとっていい。そのなかで育まれた、住民自治の精神の芽を、広域行政はどう生かすか。



安心の村は住民の力で

「介護保険制度に則ってのサービスは、大きな負担になる。小さな町や村でもやれる、地域で支えるシステムが必要だと思う」、鶴井氏の言葉である。

### 地域活性化・コミュニティ再生の主体

紀伊山地の山深く、吉野から熊野へと流れて、熊野川は新宮市で熊野の海に混じり合う。全長 180km あまりにおよぶこの川の流域市町村は、2004 年 12 月現在 13 市町村。まもなくその数は、市町村合併によって約半分になる。

そうしたなかで、和歌山県・熊野川町では女性たちのグループが、地元の食を提供する「かあちゃんの店」を開いたほか、本宮町や北山村でも地元の伝統や特性を生かす、地域づくりがみられる。「単独」を選択した奈良県十津川村では、地元の食材を活かし配食サービスの試みが、展開されている。いずれも、主体は女性たちである。50 代、60 代の女性たちが目立つ。ユネスコの世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の傍らの、住民の暮らしのなかからそれらは生まれている。自律と協働の取り組みである。「世界遺産」とは別の、地域の基層を掘り起こし、いくつもの吉野、熊野へ可能性を広げる道筋に、それらの活動を位置づけることができる。

地域社会活性化に向けた多くの取り組みが、いま女性たちによって生起している。それは、中川雄一郎氏が指摘するように、『『地域の問題は地域で解決する』、というコミュニティ・アイデンティティに基礎をおいたボランティア活動であったり、(経済事業も経営する) 協同活動であったりする。「生活者としての自立の道を模索しつつ、暮らしという最も根源的な部分で、地域社会の改革と活性化を目指して立ち上がった」自主的な協同活動<sup>(6)</sup>である。その「地域社会の改革」が次次第に人びとの意識を変えてきていることは、本論文で取り上げた事例が示している。

「身の丈の原理に立脚しているから、地域資源の再評価と有効利用を基本とし、そのことが風土性へのこだわりという色合いを生み出す。身の丈の原理は日常

(6) 中川雄一郎「オルターナティブの可能性」「協同で再生する地域と暮らし」終章 p280

の感性と不可分である<sup>(7)</sup>」。そのとき女性たちが、地域活性化・コミュニティ再生の主体に躍り出る。

いま、いくつもの地方で、「結い」の現状は社会経済環境のうちに埋没し、死語化しつつあるように見える。それに代わるのが、現代の協働＝コラボレーションとして、それは「結い」のなかにあった協同一労働と娯楽＝をすくい取り得るだろうか。現代の協働のうちに、新たな「結い」の構築が求められている。

新たな「協働」を実現していくひとつの可能性は、「知恵や協力をそれぞれのメンバーの役割・持ち味として大切にしながら協働関係」を維持する、女性たちの「ゆるやかな連携としての協働」<sup>(8)</sup>のなかにありはしないだろうか。

### 引用・参考文献・資料

- ・『広辞苑』（第二版第二刷） 新村出編 岩波書店 1970 年 2 月
- ・「日本農村社会学原理 『家族・婚姻』 研究文献選集」 鈴木栄太郎著 株式会社クレース出版 1990 年 2 月
- ・柳田国男監修「民俗学辞典」 財団法人日本民俗学会編 東京堂出版 1984 年 3 月
- ・『綾』の共育論 浜田倫紀著 評言社 2002 年 7 月
- ・岩出山町「男女平等推進条例」
- ・「協同で再生する地域と暮らし」 中川雄一郎編集 農林中金総合研究所編 日本経済評論社 2002 年 10 月
- ・「持続可能な地域経済の再生」 財団法人 東北開発研究センター「持続可能な地域経済研究会」編 ぎょうせい 2004 年 11 月

---

(7) 東北開発研究センター「持続可能な地域経済研究会」編 「持続可能な地域経済の再生」 p120

(8) 「持続可能な地域経済の再生」 p128～129